

口絵および本文中の資料写真について

文化財保護の主旨と治安維持のための取締りとは互いの目的が異なるため、拮抗して両立しない場合がある。

いつの時代までを古式銃とし、いつの時代からを新式銃とするかの区分も、年月の移ろいによって変化せねばならないが、現行法では「おおむね慶応三年」までとし、おおむねの中は慶応四年九月七日（西暦一八六八年十月二十二日）までとされている。

技術史や国史上の視点からは、明治の中期にも古式銃に類別される資料が存在し、登録証も交付されている。

古式銃の種別は「火なわ式・火打ち式・管打ち式・ピン打ち式・紙薬包式・以上に準ずる銃砲」の六種に分けられているが、この分類は法解釈上の問題を残している。

そのため登録対稱外とされたスミスアンドウェッソンだけではなく、一部の「縁打ち式・中心打ち式」の拳銃類にも登録証が交付されて社会問題化しつつある。

本書では、そのような法的混乱を避けるために一部の資料写真は銃刀法の制約をうけない「無可動銃」や外国で撮影されたものが使用されている。

古式銃入門

日本の古銃

著者のことば

わが国に鉄砲が伝来して以降、明治の寸前までに製作され、国内に現存している銃砲は古式銃と呼ばれています。

古式銃のほとんどは文化財として認められ、個人の所有が許されています。しかし古式銃は刀剣と同様に所持するためには「銃砲刀剣類登録証」が交付されなければなりません。

平成七年の三月三十一日までに各都道府県の教育委員会から交付された古式銃砲への登録証の総数は「火なわ式銃砲」が六四、六六七挺、「その他の形式の古式銃砲」が一七、七六一挺と文化庁において統計されています。

現在国内には、まだまだ未登録の古式銃が物置や蔵の中などで眠っておりまして、海外へ流出した日本製古式銃も含めて、その総数は想像もつきません。それでも、少なくとも六万挺以上の日本製火縄銃と、一万七千挺をこえる日本製外國製洋式古銃が現存しているのです。

この統計からも窺われますように、わが国では火縄式銃砲が製作され、使用された期間が西欧や他の諸国に比して長かったのです。

鉄砲伝来後、幕末に至るまで伝来銃を祖型とする旧式火縄銃を墨守し続けた日本人の旧弊頑迷を世界に類例のない反進歩として酷評される事が多いようです。一見すれば同一の型式である単調な火縄銃にも、熟視すればさまざまな変化が見られます。

また同時に燧石式銃や雷火式銃、圧搾空氣式銃などヨーロッパで開発される新

形式のあらゆる銃種にも追隨し、国産化に成功しています。

ここでは火縄式銃砲だけではなく、各種点火機構の変遷をもふくめて江戸時代の砲術家や製銃技術者が苦心と努力を重ねて製作したであろう作品を蒐集し分析しました。

また暮末期に大量に輸入された歐米の軍用銃や、昭和四十年代の一時期のみ輸入された外國製古銃も、その現存数が少ないとために現在では貴重な資料となっています。

機会さえあれば、誰でも入手することのできる古式銃の基本的な知識を解説するため、可能な限り実物に接して分解、整備、計測、時には発射実験や操銃作動までを検証して分析しました。

日本の銃砲史は特異な面があり、体系的な研究がなされなかつた学問的分野です。国内における古式銃砲の実物資料や古文献の散逸や滅失は甚だしく、もはや日本銃砲史の全貌を論述することは不可能とされる現状です。

この書は、そのような状況下にあっても未発見の新資料を掘り起こし、国外流出資料を追跡回収するなどの努力を重ねて著述しました。

また既刊の古式銃研究書にはなかつた地方的特色の分類、砲術流派別分類、機構上の分類、用途別の分類、二千名の鉄砲鍛冶銘の分類がなされていて、新たに古式銃に関心を持たれる初心者の方々にも、わかりやすい古式銃入門参考書としてお役に立つことと信じています。

日本の古銃総論編 目次

古式銃の定義と種別

指火式銃砲

原始手銃
火矢筒
阿波筒
長州筒
土佐筒
讃岐筒
伊予筒
備前筒
仙台筒
薩摩筒
肥後筒
肥前平戸筒
米沢筒

火縄式銃砲

原始手銃
火矢筒
阿波筒
長州筒
土佐筒
讃岐筒
伊予筒
備前筒
仙台筒
薩摩筒
肥後筒
肥前平戸筒
米沢筒

製作年代による時代区分

火縄式銃砲の時代考証
暗黒期
前期
中期
後期

製作地別による地方的分類

堺筒
日野筒

砲術流派の仕法特徴による分類

稻富流用銃
田付流用銃
霞流用銃
荻野流用銃
南蛮流用銃
関流用銃
田布施流用銃
酒井流用銃
井上流用銃
陽流用銃
勝野流用銃
直徹流用銃
流名不詳銃

用途別による分類

軍用銃
獵用・射的筒
火縄式銃砲の用具と操法

燧石式銃砲

火打ち式銃砲
輪燧式銃砲

140 136

128 126 124

122 120 117 116 112 110 108 102 101 100 98 94 90

142

88

96 94 90 76 70 66 60 58 54 50 44 40

雷火式銃砲

国産雷火銃

粉砲
生火銃
佩弾銃
極密銃
剣間銃
必勝剣
喧啄発馬上銃
神雷砲
備前式雷火銃
傍装雷火銃
迅発擊銃

172 170 168 166 165 164 162 158 156 153 152

148 147 146 146 144

142

砲術流派について

砲術流派名一覧

36 28

24 22 20 13 12

4 2

管打式和銃

火縄銃改造管打式銃..... 174

洋式管打銃

出来助ゲベール..... 176

國友ゲベール..... 176

ヤーゲルライフル..... 176

カラバイン銃..... 176

ピストール..... 200

前装式管打銃

ゲベール銃・カラバイン.....

ヤーゲル銃・ピストール.....

ミニエーライフル.....

マンソーライフル.....

ウイットウォースライフル.....

スプリング.....

フィールドライフル..... 200

国産連発式管打銃

四連銃.....

三連銃.....

六連銃.....

スナイダー式・ボルト式.....

中折式・銃身偏出式.....

高三式.....

国産内火式銃

スナイダー式・ボルト式.....

中折式・銃身偏出式.....

高三式.....

外国製雷火式銃

シャープスカービン.....

幕末洋式銃.....

管打式ピストル.....

後装内火式銃

208 207

外国製雷火式銃

190 188

後装内火式銃

187 186 185

特殊中心打式

スナイダーライフル.....

ジョスリンカービン.....

アルビニーライフル.....

ウェンツルライフル.....

ドライゼライフル.....

ドライゼカービン.....

ドライゼリボルバー.....

シャスピーライフル.....

リボルビングライフル.....

ホルラーライフル.....

貢囊式单発拳銃.....

中折式水平二連拳銃.....

ペッパー・ボックス拳銃.....

各種リボルバー拳銃.....

220 219 219 219 218 218

ピン打式銃砲

リボルビングライフル.....

ドライゼライフル.....

スナイダーライフル.....

ジョスリンカービン.....

アルビニーライフル.....

ウェンツルライフル.....

ドライゼカービン.....

ドライゼリボルバー.....

シャスピーライフル.....

特殊型式銃

メルワインフロント
ローディングリボルバー.....

ノエルターレット拳銃.....

229 229

中心打式銃砲

レミントン

ローリングブロック.....

スペンサーライフル.....

ヘンリー

マルチニーライフル.....

トラップドアースプリング

フィールドライフル.....

228 227

縁打式銃砲

スペンサーライフル.....

ヘンリー

ワインチエスターライフル.....

スタークルカービン.....

S・ハンキンスカービン.....

各種拳銃

225 224 224 223 223 222

遊底開閉式

リチャードライフル.....

ウイルソンライフル.....

ターリーライフル.....

スタークルカービン.....

206 205 204 203

薬室扛起式

ホール式ライフル.....

リンドナーカービン.....

バーンサイドカービン.....

202 202 201

後装式管打銃

ホール式ライフル.....

リンドナーカービン.....

バーンサイドカービン.....

200 199 198 197 196 194

指火式銃砲

(タツチ・ホール)

砲身、あるいは銃身の火門に直接火を
おしつけて点火させるものである。

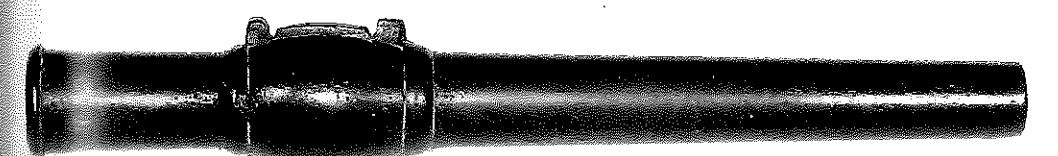
わが国では指火式の小銃は見られない
が、支那製や朝鮮製の原始手銃と呼ばれる
ものが散見される。単銃身のものが多
く、まれに二本、三本の銃身のものがあ
る。

原始手銃

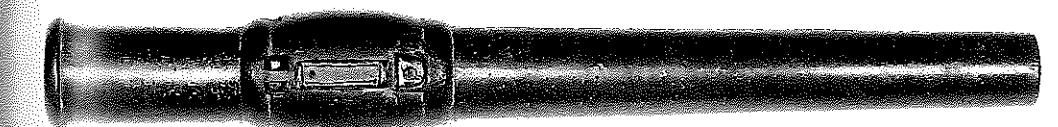
●永楽銃銃（支那）

永楽年間に六萬挺以上も製造されたも
ので薬室部が蓄形に膨らみ砲身の肌は滑
らかである。

本銃は永楽二十一年（一四二三）に鑄
造されたもので長方形の火皿に蝶番式の
火蓋がつく形式である。



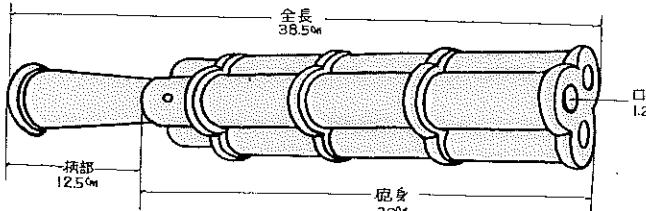
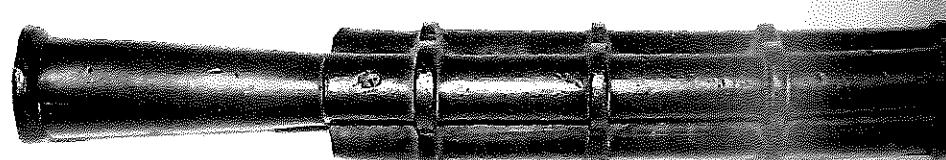
永楽銃銃 永楽21年（1423）支那製
全長36センチ、口径1.5センチ



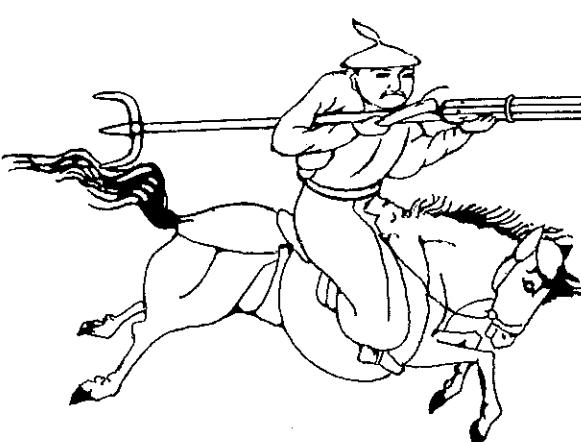
長方形の火皿 火蓋は欠損している

銘 天字陸萬壹號
永樂貳拾壹年玖月日造

三眼銃—原始手銃 青銅製三眼銃 銘／行營上
支那製を模倣した朝鮮製と推定される。各銃筒は
完全に独立して連発銃として使用できる。



馬上で三眼銃を放つ図



馬上で三眼銃を放つ図（原典『神器譜』）

●勝字銃（朝鮮）

支那製銃銃を模倣した朝鮮製の手銃で、
砲身に多くの瘤状隆起が見られるのが特
徴である。

銘文のあるものが多く「勝」の字が見
られ十四世紀なかばから十八世紀末まで
に製作され長短ささまざまな型式がある。八
箭銃筒・四箭銃筒などと稱せられるもの
は箭（矢）を束ねて発射したためである。

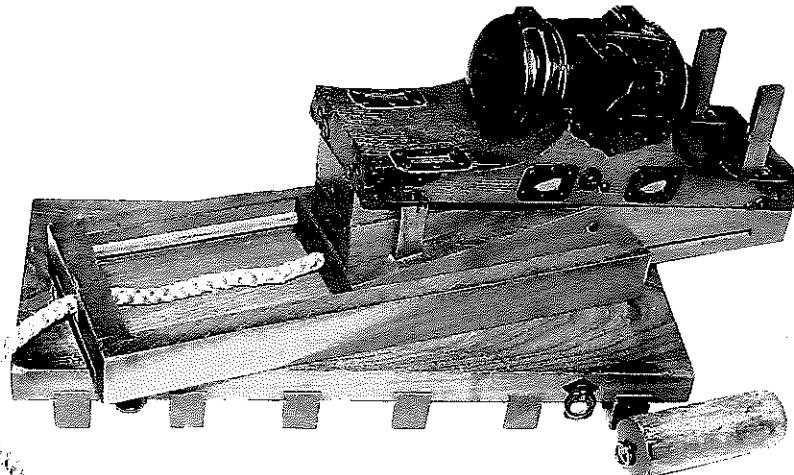
●三眼銃（支那・朝鮮）

本銃は二本の銃身が四つの鉢で束ねら
れたように铸造された青銅製手銃である。
三本の銃身にそれぞれ火門があり、三連
射できる連發銃である。

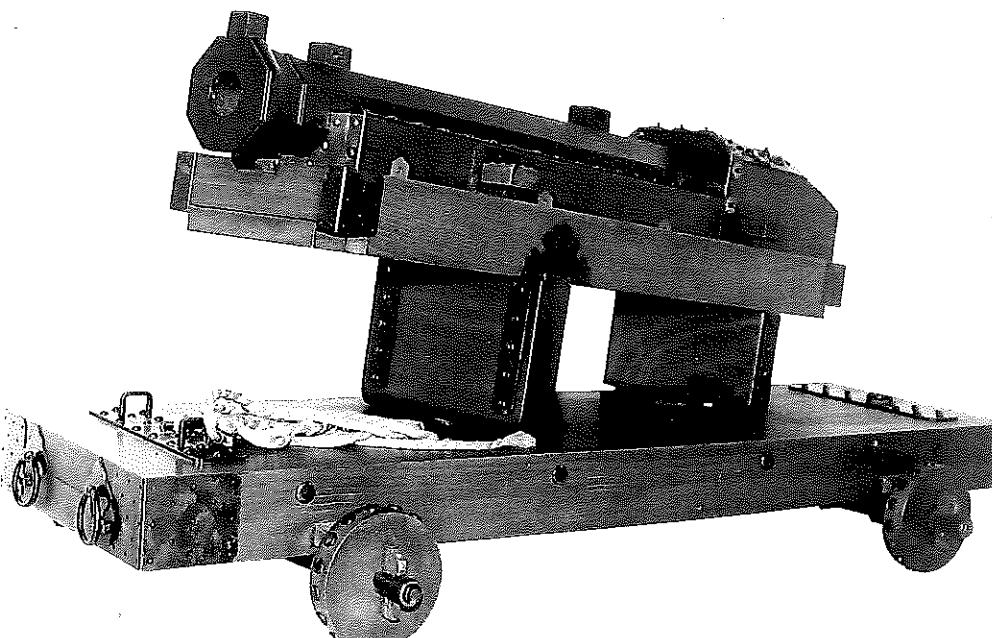
「神器譜」では主に騎上で用い、三射後
は棍棒として敵を搏撃する。
「古銃事典」五十七頁では「三眼銃の火
門は三本の銃身に対して一つであるから、
点火すれば、三銃身同時に発火する」と
述べられているが誤りである。

火矢筒
ひやつつ

ひ
や
わ



中和流短火矢筒・百目玉・青銅製 口径4センチ
砲架が完備した百目玉短火矢筒であるが、砲身の台木への据え方が異風で、寛永の島原の乱で活躍したオランダ砲(モルチール)の影響を感じるものである。



おぎの
荻野流自由台火矢筒・百目玉鍛鉄製大砲 銀象嵌「敵虎」
仰・俯・旋回・駐退と、その制動装置を有する。百目玉鍛
鉄砲身で、砲身長は八十分の一の実用的なものである。
「元治元年甲子三月吉日 臣 森田政右衛門 実朝資造臣
森田直助 中由助 助役」の銘があり、四つの台車輪が付け
られている。

艦長わざかに四・五センチのものもあり、火薬と弾丸を装填すれば弾丸が半分以上も露出していく、発射しても弾道などあり得ないと思われる。それでも砲架は仰角・俯角・旋回・駐退の各機能を備

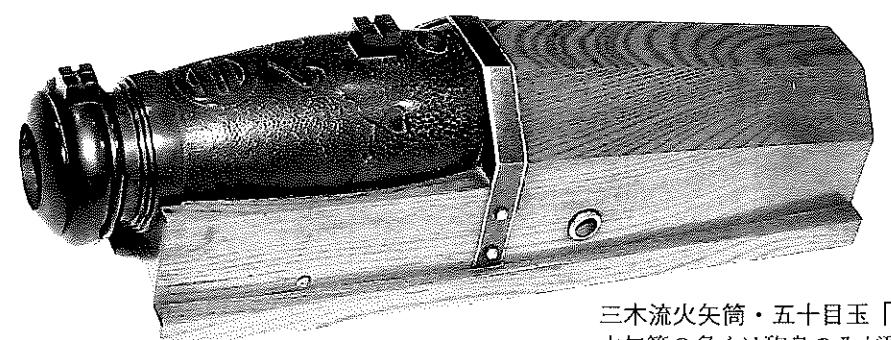
この他に破羅漢・石火矢などと呼ばれる大型指火式大砲があるが、全て登録証は不要である。

火矢筒は小型の大砲と言うべきもので、鍛鉄製と青銅製がある。筒長わずか五・六センチのものから一メートルをこえるものまである。

百目玉筒（口径四センチ）、五十目玉（三センチ）といった大口径でありながら、砲身の異状に短いものはおうおうにして模型か雛型の如くに考えられてきたが、実際に発射することができる実用品である。棒火矢を発射するために考案されたものであるが、鉛弾を発射することも可能である。

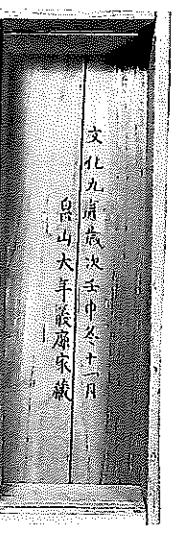
棒火矢は寛永時代に播州の三木茂太夫によって創始されたとされるが、火矢筒が出現するのは寛文時代以降である。

棒火矢の発射は抱え打ちと、据え打ちがあるが、火矢筒は後者に使用される。



三木流火矢筒・五十目玉「青龍」唐銅製 口径3.1センチ
火矢筒の多くは砲身のみが残存し、台座の備わるものは
少ない。本資料は所有者・製作年期・製作者名・製作由来
が二重箱に墨書きされ、砲身上に畠山家家紋を表わした伝
來のあきらかなるものである。

火
技
者
將春之術曰三木流斯流也不啻技之精熟有造器法也将春已得其秘妙
焉。
石川治右衛門 鎏馬
芝近莊十郎 鋸匠
畔柳郁之進 路
銑工
發墳之銑不成用故重喬飾焉琢之磨之以木臺之戰陳之具成矣。
家 宰
工人善作而有不適屬者之意者屬者之意亦有工人不了一者妄如鑿醫革
此之情。



火縄式銃砲

(マッチ・ロック)

火縄式銃砲は火縄銃と呼ばれ、天文年間に伝來したものである。

最初に伝來した火縄銃の形姿については、諸説があるものの不明とするのが正しい。

伝来後、三世紀にわたって生産が続けられた日本製の火縄銃は、完成度・現存量とも世界第一である。

火縄銃は銃身・銃床・機関部の三部からなり、狙点を定め引鉄を引けば瞬時に発射され得中するもので、銃器としては完成されたものである。

現存する火縄銃は慶長期から幕末まで

のもので、大半が江戸中期以降の作品である。

日本の火縄銃の大きな特徴は銃床の形にあり、肩付式ではなく、頬付式の短いものであることで、これは伝來銃の祖型を守りつづけたためである。

火縄銃は文字通り撃発点火に火縄を用いるために、機関部には必ず火挟みがみられる。

この機関部は外観的には「外カラクリ」と「内カラクリ」に大別され、外カラクリは平カラクリ、外記カラクリ、蟹目ナキカラクリの三種、内カラクリは蟹目ナキカラクリ二種と蟹目カラクリ・緩発式カラクリがあり、八種に分類される。

火縄銃は構造上の変化がとぼしく、一方的に見えるが、用途別・製作年代・地化としてみられる。

国内に現存する火縄式銃砲は、平成七年三月において六万四千六百六十七挺である。

しかし、鉄砲伝来後、永禄・元亀・天正期の戦乱のさなか、実戦に使用された火縄銃の遺品は少なく皆無にひとしい。

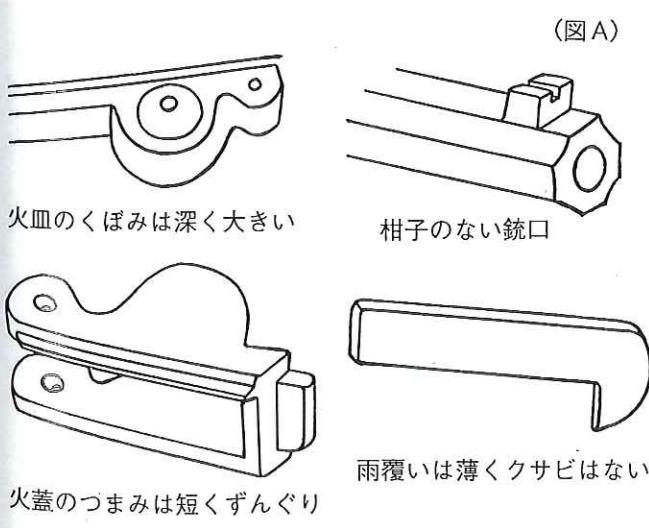
慶長期以降の作品が残存するため、慶長以前の日本製火縄銃の外貌を推定することができる。

まず銃身は八角銃身で柑子はなく、口径は鍛筒技術の限界もあって十五ミリ、十六ミリ以上二十ミリ前後となり、比較的

重いものとなる。

火皿の深さは深く大きい。火蓋の指かけは短く小さい。雨覆いは直付けで楔はない。多くは用心金をつけない(図A)。

銃床は庵が浅く直線的で、日本人の体格から銃床の長さは伝來銃に比して短くなる。



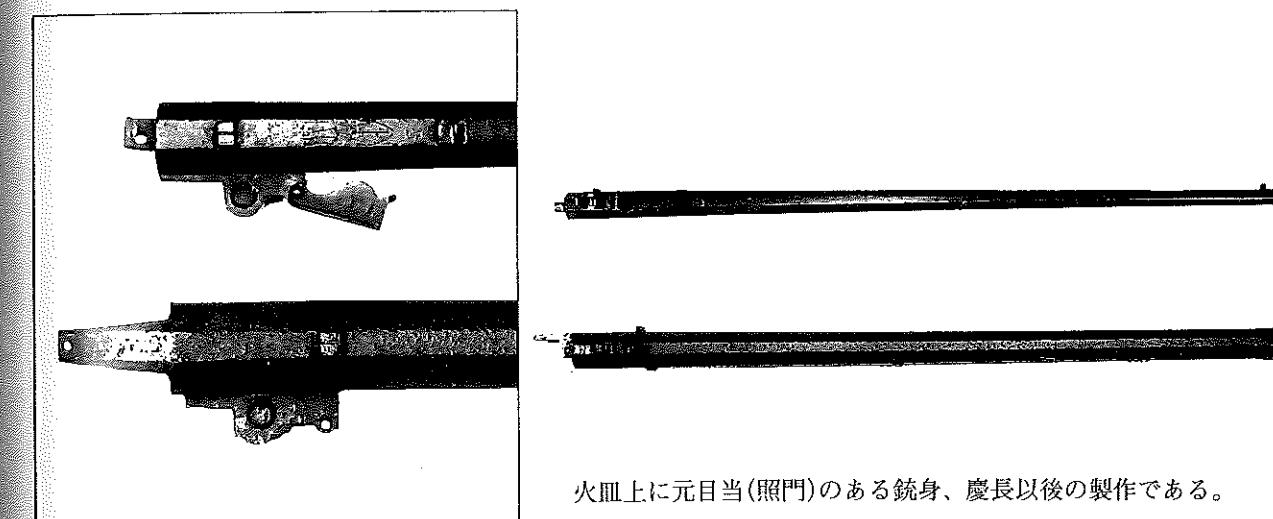
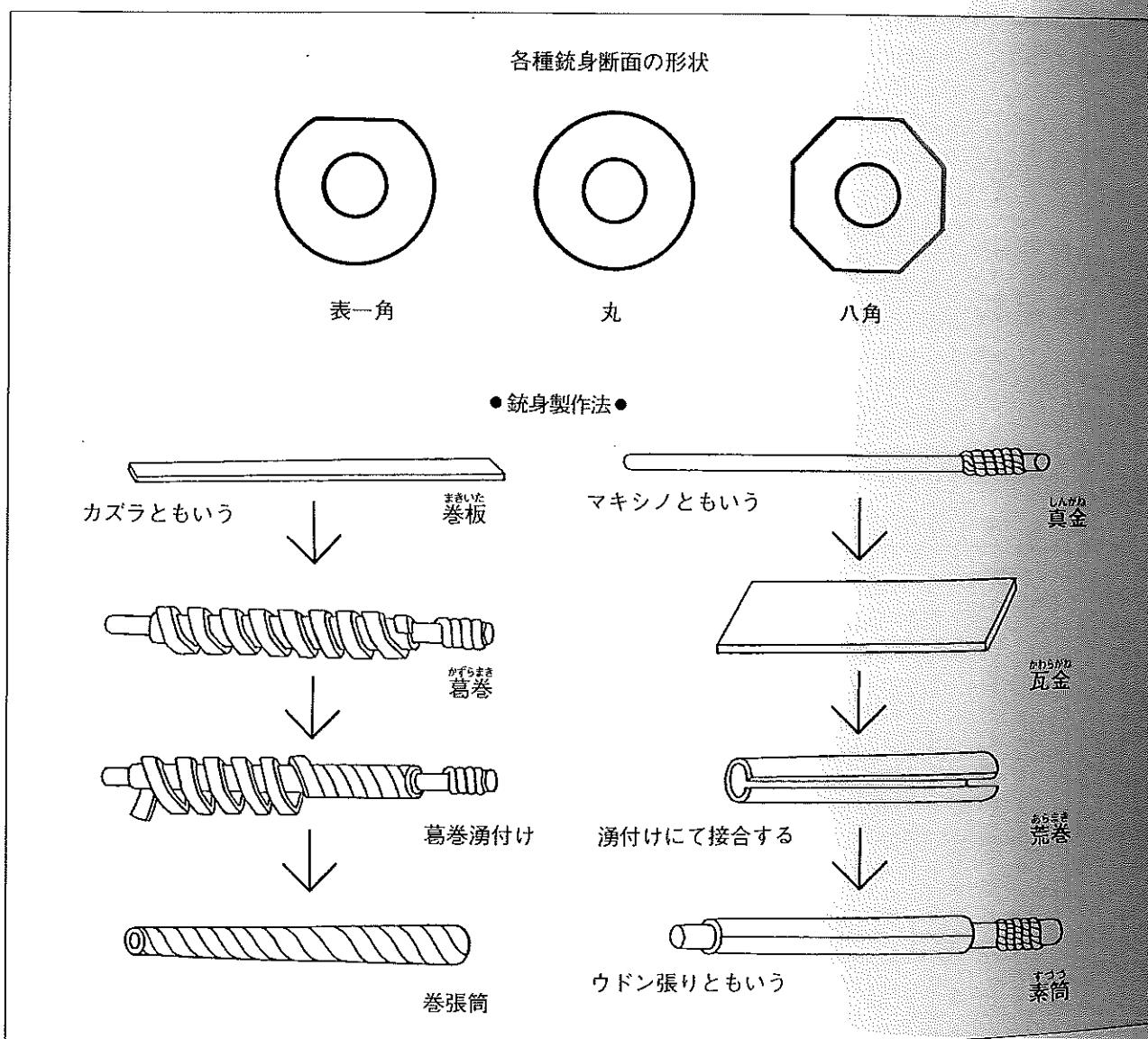
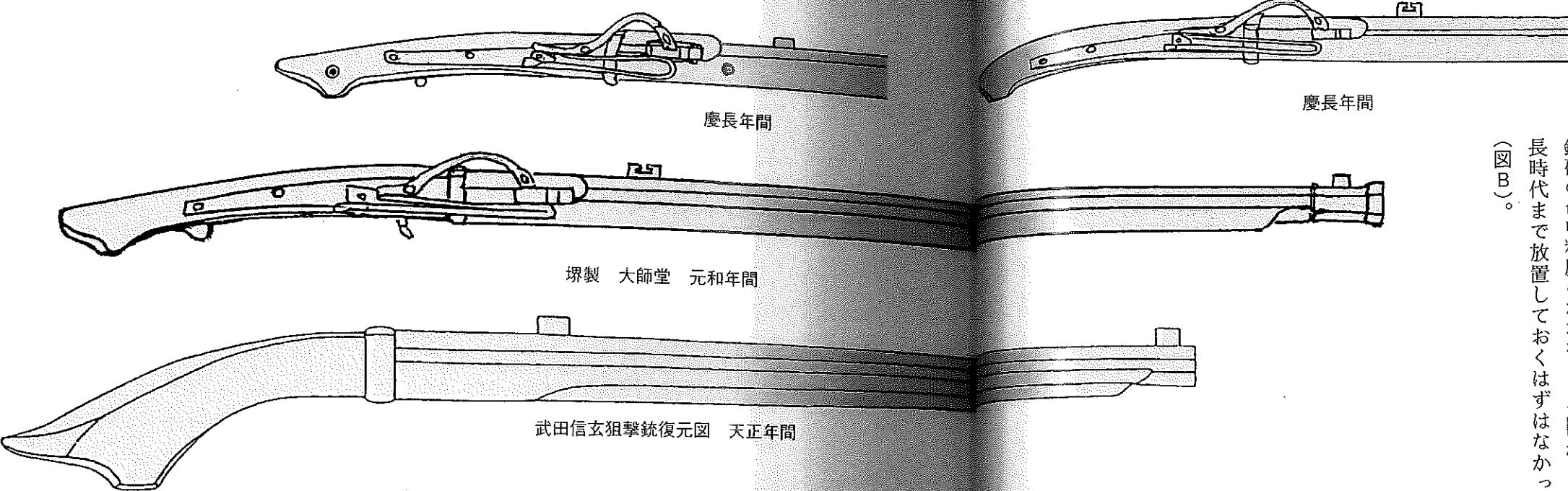
火皿の真上にあつた元目当の位置が前方に移動するのが慶長ころとする説があるが、元目当の前方移動は伝来後、直ちに始まっている。

また慶長時代以降の作品にも、火皿の上に元目当が位置するものもある。

伝来銃の銃床は矮小な日本人の体格に合わせて短縮され、その長さだけ元目当の位置を前方へ移さねば焦点があわない。

戦国の砲術家たちが、戦況を左右する鉄砲の命中精度にかかるるこの問題を、慶長時代まで放置しておくはずはなかつた(図B)。

(図B)



製銃技術

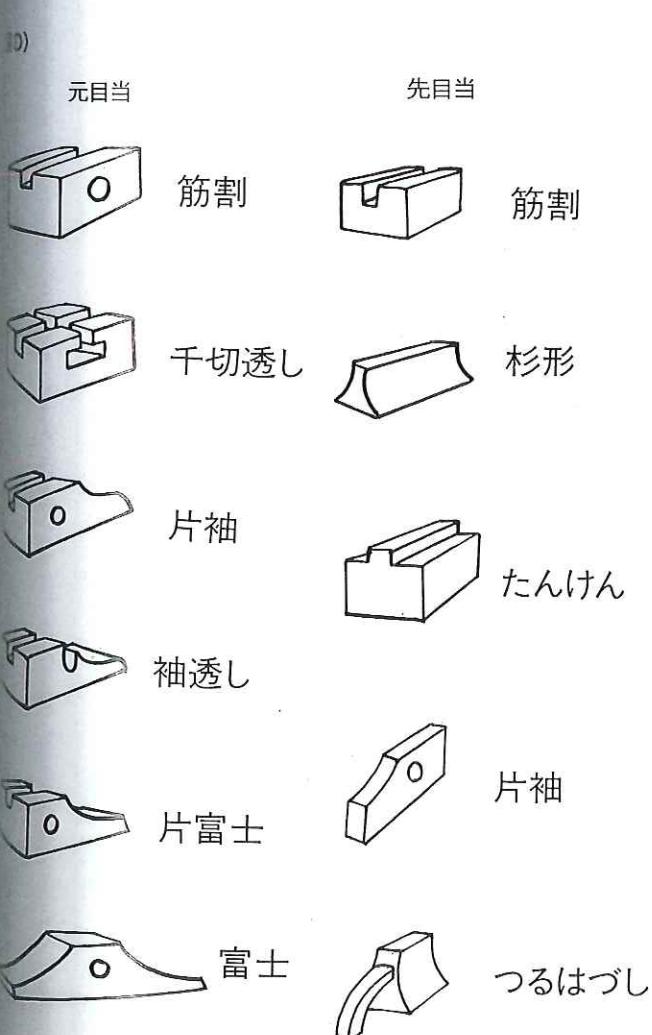
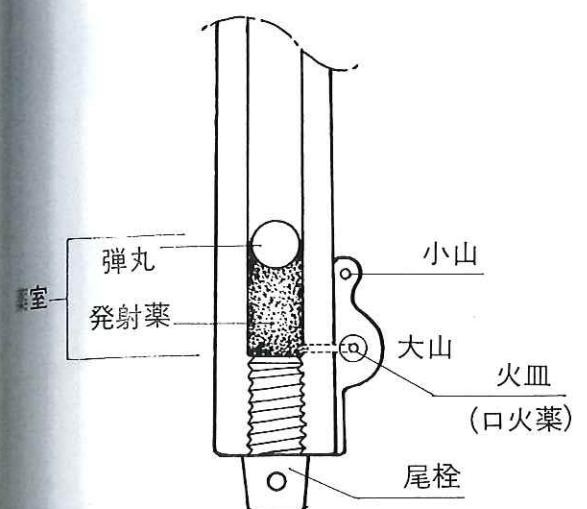
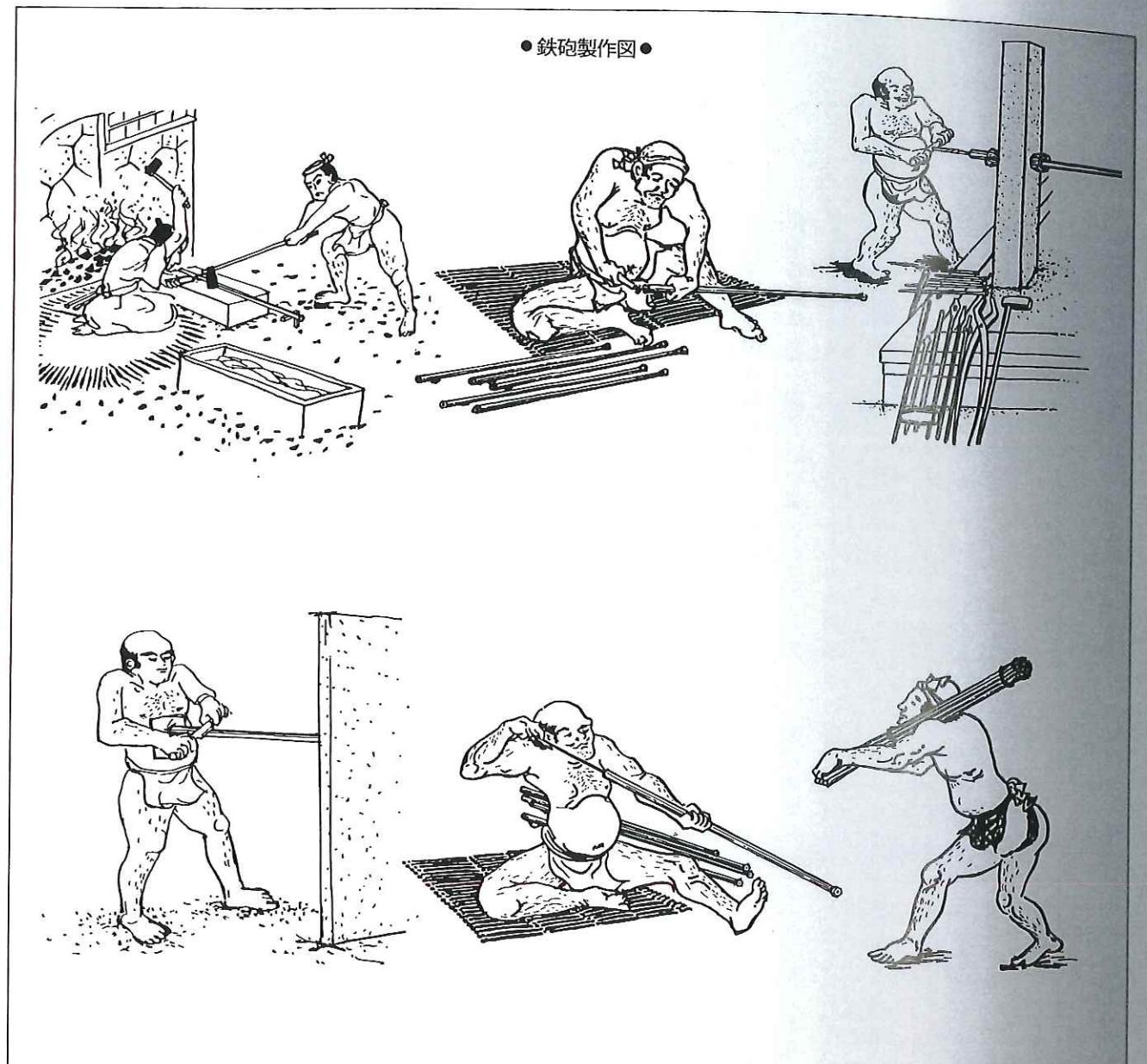
銃身の製作は、まず口径を定める「真金」を用意する。次の短冊様の「瓦金」をり、炉で赤熱させて真金を包むようくめで筒にする。

接合部は重ねて湧し付けにするが、これを「素筒」と呼び、このまま仕上げ銃身としたものを「うどん張り」といふ。さらに「葛金」と称するリボン状の鉄を巻きつけ、鍛接した筒を「巻張り」といふ、二重に重ねたものは「二重巻張」と呼ばれる。

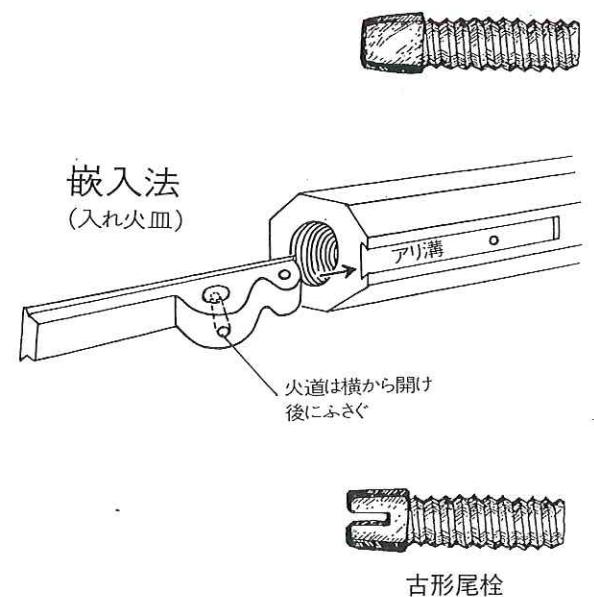
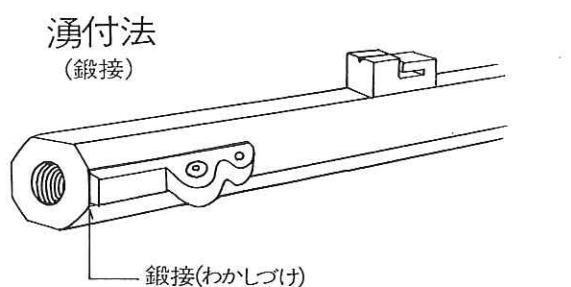
銃身の内腔は「もみしの」により、らかに研削される。

銃身の外面は、鍛造の過程で自然に角筒となる。これは、オタタゴンバレとして世界共通の形状である。

銃身の表面は鏝やセン掛けによって、筒や丸筒に仕上げられる。丸筒の上面を平面に仕上げたものは「表一角」筒と呼ばれるが、現実には二筒とすべきである。



(図C)
火皿の付け方二種
(湧付法の方が丈夫である)



銃身尾部には「ネジガタ」や捻錐で雌ネジが切られ、尾栓（雄ネジ）をねじ込んで閉鎖する。尾栓の前部に火皿をとりつけ、火道をもうける（図C）。
銃身上面には、照準器として先目当と元目当をとりつける。
目当の形状は年代・用途別・砲術流派別・地方的特徴などによって変化を見せている（図D）。

製作年代による時代区分

◇火縄式銃砲の時代考証◇

現存する火縄銃には製作年を示す年記銘のあるものは少なく、銃工銘も充分に調査されていないため、刻銘から製作年代が判別できる作品は多くはない。

鉄砲伝来の天文時代から慶長初期までの約六十年間は相当数の鉄砲が製作され使用されたにもかかわらず遺品が殆ど残されていない。

わが国銃砲史上の暗黒時代である。天正時代に使用されたと伝えられる京都市大徳寺の塔頭、龍源院に藏される十五匁玉筒は重量に富む置き筒であるが機関部が失われている。

また天正元年、新城の野田城において武田信玄を狙撃したとして宗堅寺に保存されている「信玄砲」なるものは銃身のみが残され、弾丸鋳型が一膳附属しているのみである。

尚古集成館に展示されている川上家伝

暗黒期（天文中期～慶長初期）

鉄砲伝来の天文十年代から慶長初年頃までに製作されたと確定できる遺品は皆無である。

戦国期に製作され使用された火縄銃は相当な数量のはずで、その全てが消失してしまっていることは信じがたいことであるが、悲しむべき現実である。

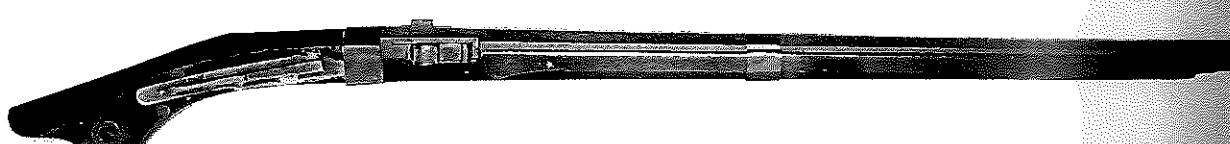
この時代に製作されたと伝えられる数点の遺品はあるが、全て伝承にもとづくもので絶対的な史料ではない。

●京都龍源院「喜蔵とりつき銃」

全長一・五九メートル、口径一・九五センチの据筒である（写真1）。

銃床尾右側に「天正十九月九日喜蔵藏」とりつき」と墨書きされている。所荘吉氏著「火縄銃」P47では「天正一年九月十九日喜蔵となりつき」とあり、「図解古銃事典」P81では銃床左側に墨銘がかすかに読めると写真で示されているが、事実と少し異なっている。

写真1



天正十九月九日喜蔵とりつき銃
全長159センチ、口径1.95センチ
京都大徳寺塔頭 龍源院蔵

來の十三匁玉筒は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原役において島津軍が敵中突破の退却戦での使用と伝えられるもので馬上用の騎銃である。

種子島開発総合センターに展示されている伝来銃と国産第一号銃は種子島家に伝來したものと伝えられるが天文時代の資料ということになる。

また種子島家以前の旧家である上妻家に伝わる朱塗りの十匁玉筒は薩摩の川上家の朱塗りの十三匁玉筒と酷似しており、慶長以前の作品と伝えられている。

このように戦国期の火縄銃と伝承される遺物が数点残されている。これらを実見し鑑定検証して考察を試みた。

資料の少ない伝来直後の数十年を暗黒期とし、六萬数千点の資料が現存する江戸時代の火縄銃を前・中・後の三期に分析してみた。

安政開国

明治維新

後期	中期	前期	暗黒期
安政元年 慶応四年	寛政・化政期	生類憐みの令 鐵砲改め	天文十二年 天正三年
安政維新	元禄時代	朝鮮出兵 関ヶ原役	長篠の戦
明治維新	文禄元年 慶長五年	元和偃武 寛永鎖国	寛文時代
	元和元年 寛永十六年		

巾広い胴金や環帶は真鍮ではなく銅板の彫嵌み跡の型式では大型の平カラクリである。火挿みを止める横鉄穴の位置は地板の上端より上へとび出している。用心金が付けられていた痕跡があり、部品の一部が残されている。

機関部は全て欠失しているが、機関部の彫嵌み跡の型式では大型の平カラクリである。火挿みを止める横鉄穴の位置は地板の上端より上へとび出している。

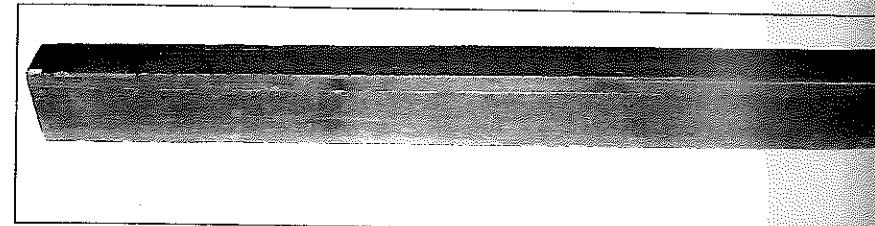
後方で、「天正十一九月九日喜蔵とりつき」と書かれ、「年」の文字はなく墨跡ははっきりと読みとれる（写真2）。



仙台筒 江戸時代の作品で金森長近所持では時代が合わない。



写真3



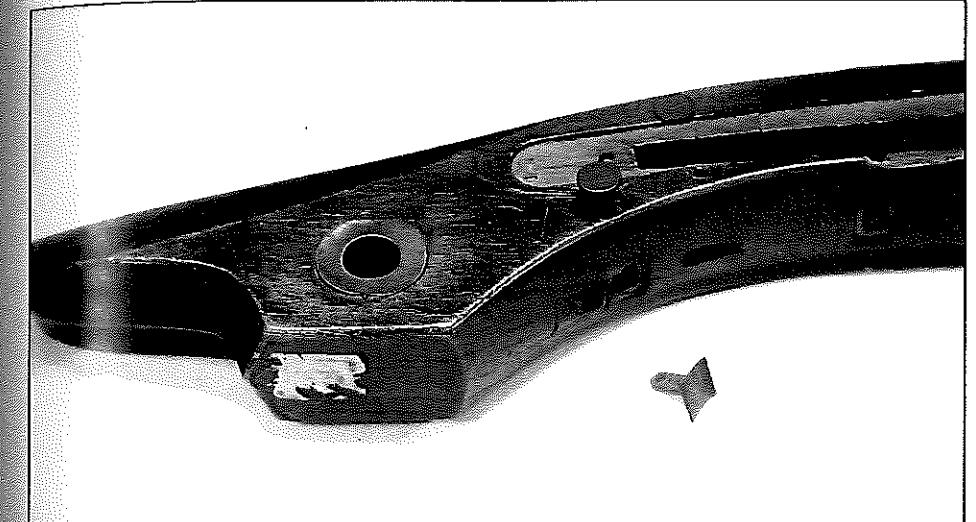
寒山 鉄砲箱
台木に寒山の彫刻はない。

龍源院では金森出雲守可重が奉納した
ものと説明している。全体の形式は慶長
以前の火縄銃として充分に考えられるも
ので天正時代の作品としても否定はでき
ない。

墨銘中の「喜蔵」とは可重の名であり、
可重の使用銃というより戦利品であつた
と見るべきである。

ただ可重の父、金森長近使用として同
じケースに陳列されている四匁玉筒は仙
台筒の形状を示すもので江戸時代のもの
である（写真3）。

台木に「寒山」と彫りつけられている
と説明するものがいるが、そのような形
跡はない。



用心金のあった痕跡がある。

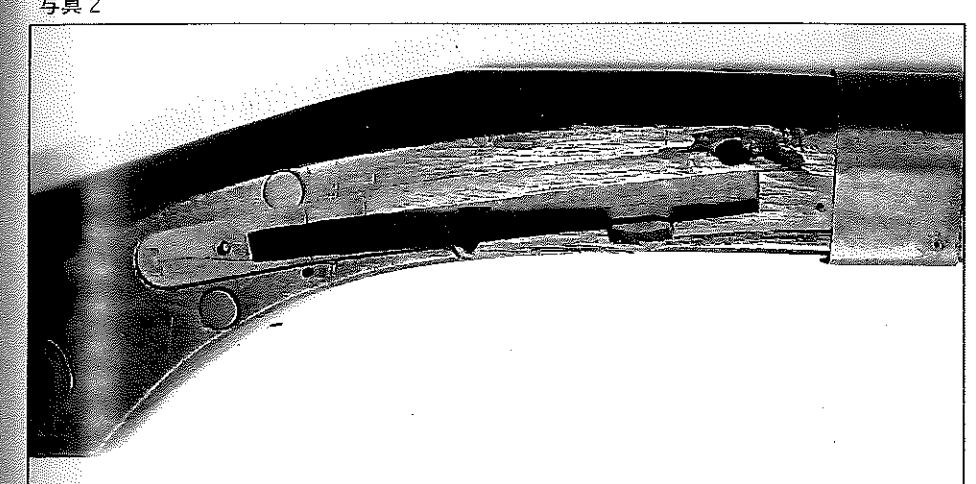
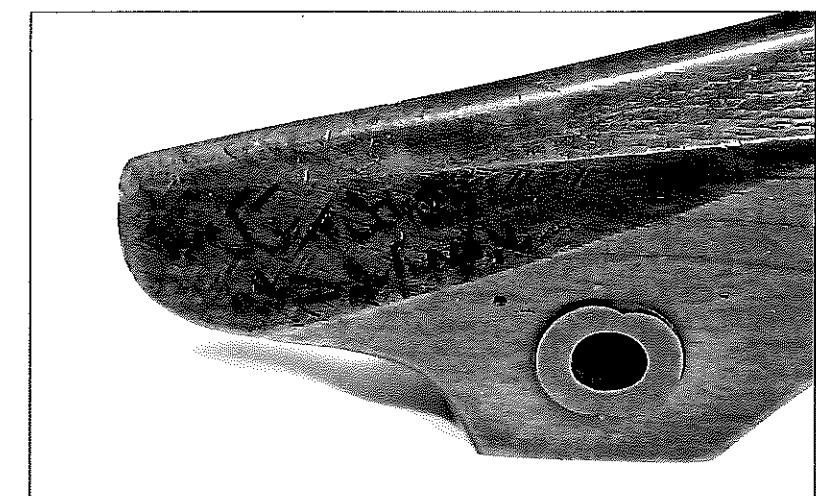


写真2
墨銘は銃床右側に
「天正十一九月九日喜蔵とりつき」



失なわれた地板は稻富カラ
クリの特徴を有していた。

●新城市宗堅寺「信玄砲」

長以降のものに属していると述べるなど
混亂している。

銃身のみで全長一〇五センチ、口径二センチの十三匁玉筒である。薬室部上面に十三匁と象嵌されている（写真4）。

相子はなく、目当は前後とも筋割型である。刻銘の跡があるが鋳で判読が困難で、先年の科学的調査では字画が現れ、室町期の刀剣の銘振りに共通するものがあると報告された。

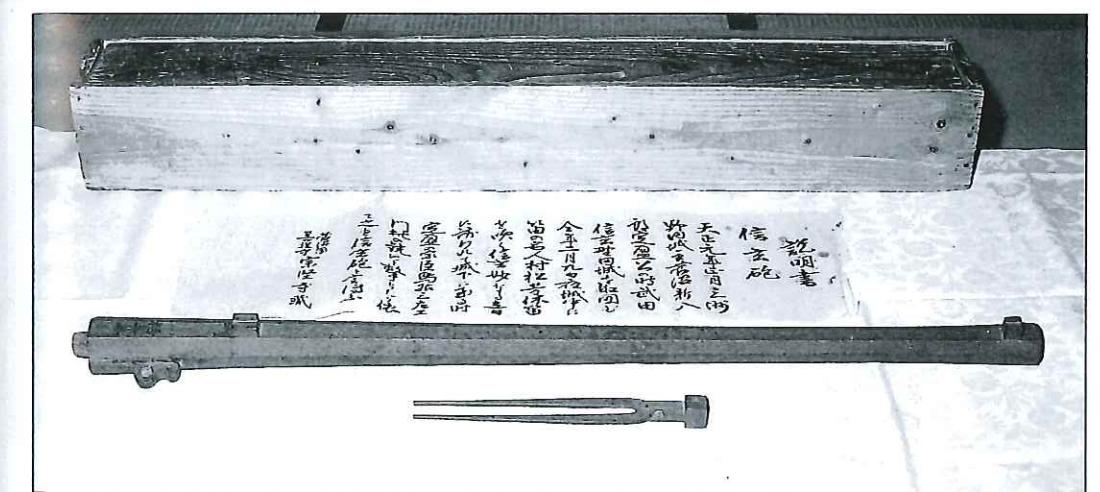
寺伝では、この銃身は野田城の備砲で天正元年二月九日の夜半に武田信玄を狙撃して負傷させ、その銃創が悪化して信玄は死亡したと伝えている。

この銃身の元目当が火皿部より前方にあることから、慶長以降の作品とされるが目当の位置に拘るのではなく、火皿の形や目当の型式が慶長中期以降の現存資料に近いと見るべきである。

武田信玄の死因を病死説と銃創説で争う論議は従来よりあり、文献的にもいづれが正しいとも定めがたい。

信玄砲が考証上成立しないとしても銃創説をも否定することにはならない。所氏の「火縄銃」では、天正頃の特色を具えた銃であると断定しているにもかかわらず、「銃砲史研究」第九号の一頁では慶

写真4



信玄砲 全長105センチ、口径2センチ
銃身上面に拾三匁の象嵌。



重量があり据置として使用されたものである

●上妻家伝来古銃

種子島に残る上妻家古銃は、全長一〇七センチ、口径一・九センチの十匁玉軍用筒である。

台木は朱漆が施こされているが、虫喰いや破損が目立つ。台尻の形に特徴があり、薩摩の川上家の戦国期の火縄銃と酷似している。

銃身は尾銓が「薦ノ尾」になっており、この部分が銃床にネジ止めされたため胴金はない。

銃口部はわずかに相子があり、銃身表面には短い線刻の鑿の跡が全面に打ち込まれている。

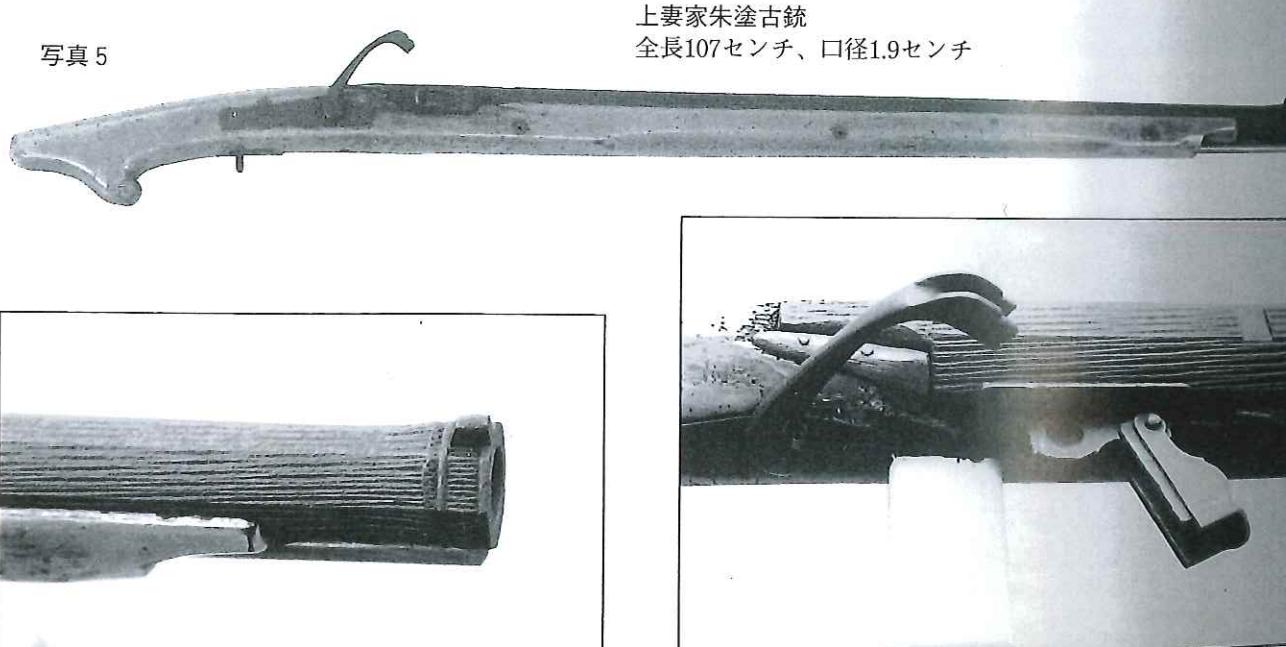
機関部は内カラクリで地板は反対側からネジ止めされている（写真5）。

上妻家は種子島へ種子島家が入島する以前の領主であったといわれる旧家である。

本銃の元目当は脱落して欠失しているが、その位置はわずかに火皿部より前方に移動している。

元目当の位置の移動は慶長以前にすでに行われており、慶長後もなお火皿部の直上に位置する作品も見られる。

写真5



相子が付けられている。

